

若い研究者へ (3)

小嶋祥三

わたしは早稲田大学文学部の出身で、大学院も博士課程の途中まで早稲田だった。ある時、ある人から「早稲田の出身者がよく京大の研究所の所長をやっていますね」と言われた。その時は、世の中にはそう考える人が多いのかなと思った。ただ、わたしはそういう考えには無頓着だった。一つには、人間は一生を通じて学び、成長すべきだと考えていたから。そんなわけで、70歳近くになってHTMLを勉強してホームページを手作りし(既存のソフトは使っていない)、友人の要請でAccessを勉強してプログラムを書いている(しばらくやっていないので、老齢の悲しさで、忘れてしまったが)。霊長類研究所のある同僚が、東大に行っていればよかった、と悔やんでいたのを聞いたが、同意、同情する気持ちは全くなかった。大学入試の成績がその人の可能性のすべてを測っているとは思っていない。「東大、京大までの人」などという言葉があり、そういう人はその実績の記憶のみを支えに自らを保っているようだが、人間の価値についてマトモな考えを持っているようには思えない。

霊長類研究所では旧帝大系の出身者が多かった。いろいろなタイプの研究者がいた。観察して気づいたのは、すでにあるものについての理解力と、姿がはっきりとしていない新しい領域を開拓する能力の違いだ。大学入試で測っているものは前者だろう。しかし、研究は新しい知見を明らかにする作業だから、既存のもの理解力とは異なる能力が必要だ(無論、理解力もある程度ないとイケない)。研究に重要なのは、何よりもまず、他者のことは気にせず、自分の研究をオモシロイ!と思うこと、夢、そして良い意味での思い込みである。この気持ちがないとやっていけない。研究には運、鈍、根が必要と聞いたことがある。根は根気のことだろうが、学問的なヤル気、持続力に関係する。ただ、ヤル気だけが空回りするのも問題だろう。テーマに関する体系、将来に関する大雑把な段階的な見通しを持っておく必要もあるだろう。それには、関連する論文を読んで理解しておくことが大切だ。そうでないと見通しの持ちようがない。鈍は鈍感のことで、とくに研究の遅滞や失敗への対応に関係する。根気とも絡むが、遅々として進まない研究や挫折に対していちいちめげていたら何も明らかにできない。周囲からの様々な批判にも負けずに応戦する必要もある。ある結果を強く願ったり、性急に結果を求めたりすることは、それが達成できなかった時の反動が大きいので、慎むべきだ。失敗は成功の母なのだから、簡単にあきらめてはいけない。運は成功した多くの研究者が言及するものだ。試薬の量を間違えたことが大発見につながった、などという話を聞くことがある。もっと一般的には予期せぬ結果が起きた時の対応だ。試薬の間違えは偶然に起こったことだろうが、その「奇妙な」結果を見逃さなかった(prediction error ですね)。そこから新しい展開が始まる。すなわち、運をつかんだのだ。データに対する鋭敏な感覚、アンテナをもつこと。先入観や偏見をもってデータをみないこと。そうでないと、つかめる運も逃してしまうだろう。